

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32610

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590196

研究課題名(和文)脳血管疾患患者の訪問リハビリテーションにおける自己実現の欲求の充足に関する研究

研究課題名(英文)Study on sufficiency of the desire of the self-actualization in the visit rehabilitation of patients with cerebrovascular disease

研究代表者

原田 祐輔 (Harada, Yusuke)

杏林大学・保健学部・助教

研究者番号：60611001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、訪問リハを利用している地域在住脳血管疾患患者の「自己実現の欲求の充足」の程度を調査し、現状を把握することを目的とした。また、訪問リハ介入が「自己実現の欲求の充足」に影響を及ぼすかどうかを検証した。その結果、地域在住脳血管疾患患者は地域の中高齢者よりも「自己実現の欲求の充足」が低い可能性が示唆された。今回の対象では訪問リハ介入による影響は認められなかったが、訪問リハの効果判定指標として用いる必要性は高いと考えられた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we investigated degree of "the sufficiency of the desire of the self-actualization" of patients with cerebrovascular disease resident in the area that used visit rehabilitation and were intended that we grasped the present conditions. Also, we tested whether visit rehabilitation intervention had an influence on "the sufficiency of the desire of the self-actualization". As a result, as for the patients with cerebrovascular disease resident in an area, the likelihood that "the sufficiency of the desire of the self-actualization" was low was suggested than a person at local old and middle age. The effect by the visit rehabilitation intervention was not found in this subject, but the need to use for an effect measurement index of the visit rehabilitation was thought to be high.

研究分野：社会科学

キーワード：訪問リハビリテーション 脳血管疾患 自己実現の欲求

### 1. 研究開始当初の背景

脳血管疾患は世界的に主要死因の一つであり、脳卒中生存者の50%以上が機能的自立度に影響を与える永続的な神経障害を残すといわれている。故に、それらのうちの多数は、障害の程度の軽減や在宅復帰のためにリハビリテーションを必要としている。

わが国では、団塊の世代の高齢化に伴い、脳血管疾患患者数は今後ますます増加していくといわれている。厚生労働省の平成25年度国民生活基礎調査によると要介護認定者の割合として脳血管疾患が最も多く、介護保険下で訪問リハビリテーション(以下、訪問リハ)を実施する際には脳卒中を対象とすることが多いと推察される。しかし、脳卒中に対する訪問リハは、その効果判定指標が十分確立されておらず、療法士はリハビリテーションの提供期間や方法に関して統一した見解が持っていないのが現状であると考えられる。

リハビリテーションの効果判定指標は、身体機能面や精神機能面、ADL自立度など様々な視点で捉えられているが、意欲や生きがい、自己実現などの心理的視点で捉えている先行研究は少ない。一般に脳卒中リハビリテーションの流れは、急性期、回復期、維持期に分けられており、訪問リハは維持期に該当するが、維持期のリハビリテーションでは、身体機能面やADL自立度だけではなく、社会参加促進やQOLの改善などにも効果があるといわれている。従って、脳血管疾患の訪問リハの効果判定指標を考える際には、身体機能面やADL自立度だけではなく、対象者の心理的側面を考慮した多面的な効果判定指標を検討する必要があると考える。

望月ら(2012)は、通所系サービスを利用している地域在住高齢者の介護予防において、身体機能が改善した状態にあっても、いかに自己実現の欲求を持ち続けることができるかが重要と示唆している。同様に、地域在住高齢者を対象とする訪問リハにおいても、ADL自立や社会参加の向上を図ることに加えて、自己実現の欲求を充足することがより充実した在宅生活を送る上では大変重要であると考えられる。

自己実現の欲求(self-actualization)は、マズローによって提唱された基本的欲求の階層理論の高次欲求であるが、先行研究では「生きがい」と同義と捉えているものも見受けられる。そこで本研究では、自己実現と生きがいを同義と解釈し、生きがい意識尺度を用いて訪問リハを利用している地域在住脳卒中患者の自己実現の欲求の充足の程度について検討した。

### 2. 研究の目的

訪問リハを利用している地域在住脳血管疾患患者の「自己実現の欲求の充足」の程度を調査し、現状を把握する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 対象

本研究は、2014年12月から2016年1月まで、K県(H市、I市、K市)の訪問リハを提供している事業所(病院、看護ステーション)にて、訪問リハを利用した脳血管疾患患者37名(男性19名;70.1±11.1,女性18名;68.4±15.8)を対象とした。病型は脳梗塞19名、脳出血17名、その他1名であった。提供頻度は週2回19名、週1回18名で、1回の提供時間は概ね60分間であった。

#### (2) 方法

各療法士が、訪問リハ提供にて家庭に訪問した際に、運動機能と自己実現の欲求の充足を調査した。また継続可能な対象者には3か月後に追跡調査を行った。

##### 運動機能

脳卒中機能評価法(Chinoら1994,以下、SIAS)を用いて、訪問リハ提供時に測定した。全22項目の中から項目1~5の運動機能項目の合計値を運動機能とした。

##### 自己実現の欲求の充足

生きがい意識尺度(今井ら2012,以下、Ikigai-9)を用いて、対象者の自己実現の欲求の充足についてアンケート調査を行った。

Ikigai-9は「生活・人生に対する楽天的・肯定的感情」(以下、「生活・感情」)、「未来に対する積極的・肯定的姿勢」(以下、「未来・姿勢」)、「自己存在の意味の認識」(以下、「自己・認識」)の3つの下位尺度(9項目)で構成され、各項目は5段階尺度になっている。

#### (3) 分析

生きがい意識と運動機能の関係性をみるために、Ikigai-9とSIASの相関分析(初回、3か月後)を行った。

訪問リハ前後での生きがい意識の変化をみるために、初回と3か月後のIkigai-9の平均値の比較を行った。

統計処理は、SPSS Statistics 24.0を使用し有意水準は5%とした。

#### (4) 倫理的配慮

本研究の目的、方法および参加の任意性を口頭と文書で説明し、参加者の同意を得た。全ての個人情報コード化し、個人を特定できないように配慮した。なお、本研究は杏林大学保健学部倫理委員会(番号:26-41)の承認を受けて実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 生きがい意識と運動機能の関係性

脳血管疾患は手足の運動麻痺が生じることが多く、訪問リハでもアプローチの対象として運動機能が選択されることがある。しかし、重度の運動麻痺に対するアプローチは難渋しやすく、運動麻痺が残存する症例を多く目にする。そこで、本研究では生きがい意識と運動機能がどの程度関係するのかを確認した。

初回時

Ikigai9 総得点と SIAS 運動機能は  $p=0.44$ ,  $r=0.13$  で有意な相関は無かった。また, Ikigai9 下位項目と SIAS 運動機能においては, 「生活・感情」 $p=0.27$ ,  $r=0.18$ , 「未来・姿勢」 $p=0.32$ ,  $r=0.17$ , 「自己・認識」 $p=0.67$ ,  $r=0.07$  でいずれの間にも有意な相関は無かった。

Ikigai9 下位項目では有意な相関が認められ, 「生活・感情」と「未来・姿勢」 $p=0.01$ ,  $r=0.42$ , 「生活・感情」と「自己・認識」 $p=0.00$ ,  $r=0.55$ , 「未来・姿勢」と「自己・認識」 $p=0.00$ ,  $r=0.49$  であった。

追跡時(3か月後)

Ikigai9 総得点と SIAS 運動機能は  $p=0.95$ ,  $r=-0.01$  で有意な相関は無かった。また, Ikigai9 下位項目と SIAS 運動機能においては, 「生活・感情」 $p=0.35$ ,  $r=0.18$ , 「未来・姿勢」 $p=0.94$ ,  $r=0.01$ , 「自己・認識」 $p=0.34$ ,  $r=-0.18$  でいずれの間にも有意な相関は無かった。

Ikigai9 下位項目では有意な相関が認められ, 「生活・感情」と「未来・姿勢」 $p=0.00$ ,  $r=0.57$ , 「生活・感情」と「自己・認識」 $p=0.00$ ,  $r=0.56$ , 「未来・姿勢」と「自己・認識」 $p=0.00$ ,  $r=0.54$  であった。

本研究では, 生きがい意識と運動機能には関係性は認められなかった。つまり, 脳血管疾患による片麻痺などの神経障害で著しく運動機能が低下した状態であっても, 直接的に自己実現の欲求に影響を及ぼさない可能性が示唆された。また, 本研究では Ikigai9 下位項目同士の相関は有意であった。これは, 地域在住脳血管疾患患者は, 現在の生活が充実している程, 未来への可能性や社会との関係における自己存在の意味を感じるということを示すものである。つまり, 現在の生活の充実度を把握し強化することで, 未来の生活への期待感を高め, また社会参加を促すことができる可能性があると考えられる。日常生活自立度は, あくまでも自立か否かを判定しているものであって, 生活が充実しているかという質の部分までは評価が難しい。在宅生活をより主体的・肯定的に過ごすために, このような質的な部分を Ikigai9 で捉えることは大変重要だと考えられた。

(2) 訪問リハビリ前後での生きがい意識の変化

初回時, 追跡時(3か月後)の Ikigai9 総得点および下位項目のいずれにおいても, 地域の中高齢者を対象とした先行研究(今井ら, 2012)の平均値よりも低い値を示した。訪問リハビリ前後でのそれぞれの得点は, 初回時に比べ追跡時の方が低い値を示したが, 初回と追跡時の差を Wilcoxon の符号順位検定にて確認した結果, Ikigai9 総得点は  $p=0.16$  で有意な差は認めなかった。下位項目では, 「生活・感情」 $p=0.09$ , 「未来・姿勢」 $p=0.42$ , 「自己・認識」 $p=0.35$  でいずれも有意な差を認めなかった。

訪問リハビリ前後での得点比較により, 今回の訪問リハビリ介入によって自己実現の欲求は変

化していないことが示唆された。その理由として, 今回の対象における訪問リハビリの提供内容の内訳をみると, 運動機能や ADL 自立度に対するアプローチが多く実施されている。運動機能と ADL は密接に関係しているといわれており, 今回の対象者へのアプローチとしては, 在宅生活における ADL などのアプローチを優先している可能性が考えられた。先にも述べたように, 自己実現の欲求の充足と運動機能の関係性は認められておらず, 今回の対象者においては運動機能に対するアプローチを主として行った結果, 自己実現の欲求の充足に変化が起こらなかったのではないかと考える。今後は自己実現の欲求の充足に影響を与えるアプローチ要因を検討する必要がある。

地域リハビリテーションは, 障害のある人々や老人が住み慣れたところで, そこに住む人々とともに一生安全にいきいきとした生活が送れるよう, 医療や保健, 福祉および生活にかかわるあらゆる人々がリハビリテーションの立場から行う活動の全てを指している(日本リハビリテーション病院協会, 1991)。故にその一翼を担う訪問リハビリにおいても, 対象者がいきいきとした生活が送れるよう, 意識的に自己実現の欲求の充足に対してアプローチする必要があり, 効果判定指標として組み込むことの重要性は非常に高いと考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計2件)

(1) 原田祐輔, 森田千晶, 下田信明, 望月秀樹「地域在住脳血管疾患患者における自己実現の欲求の充足に関する調査研究」リハビリテーション・ケア合同研究大会神戸 2015, 2015年10月1日, 神戸国際展示場コンベンションホール(兵庫)

(2) 原田祐輔, 望月秀樹, 森田千晶, 下田信明「脳血管疾患を対象とした訪問リハビリテーションの効果判定指標に関する文献的研究」第19回日本在宅ケア学会学術集会, 2014年11月30日, 九州大学医学部百年講堂(福岡)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田 祐輔 (Harada Yusuke)  
杏林大学保健学部・助教  
研究者番号: 60611001

(2) 研究分担者

該当無し

(3) 連携研究者

望月 秀樹 (Mochizuki Hideki)

杏林大学保健学部・教授  
研究者番号：20612576

森田 千晶 (Morita Chiaki)  
国際医療福祉大学保健医療学部・教授  
研究者番号：70383099